# 11/24 Tue.

第697回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 697 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
**フランソワ＝グザヴィエ・ロト** *–p.4*
FRANÇOIS-XAVIER ROTH

コンサートマスター
Guest Concertmaster
白井 圭（ゲスト）
KEI SHIRAI

**ヤナーチェク**
JANÁČEK
**狂詩曲〈タラス・ブーリバ〉**［約23分］ *–p.6*
Rhapsody "Taras Bulba"
I. アンドレイの死（Smrt Andrijova）
II. オスタップの死（Smrt Ostapova）
III. タラス・ブーリバの予言と死（Proroctví a smrt Tarase Bulby）

**モーツァルト**
MOZART
**交響曲 第34番** ハ長調 K. 338［約21分］ *–p.7*
Symphony No. 34 in C major, K. 338
I. Allegro vivace
II. Andante di molto
III. Allegro vivace

［休憩］
[Intermission]

**ヤナーチェク**
JANÁČEK
**シンフォニエッタ**［約24分］ *–p.8*
Sinfonietta
I. Allegretto
II. Andante
III. Moderato
IV. Allegretto
V. Andante con moto – Allegretto

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会



# 11/29 Sun.

第154回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール　14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 154 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

# 11/30 Mon.

第663回 定期演奏会
サントリーホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 663 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
**フランソワ＝グザヴィエ・ロト** *–p.4*
FRANÇOIS-XAVIER ROTH

フルート
Flute
**エマニュエル・パユ** *–p.5*
EMMANUEL PAHUD

ソプラノ
Soprano
**種谷典子** *–p.5*
NORIKO TANETANI

第1コンサートマスター
First Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

**マヌリ**
MANOURY
**サッカード**
**〜フルートとオーケストラのための**［約25分］ *–p.11*
Saccades pour flûte et orchestre

［休憩］
[Intermission]

**マーラー**
MAHLER
**交響曲 第4番** ト長調 **〈大いなる喜びへの賛歌〉**
［約55分］ *–p.12*
Symphony No. 4 in G major
I. Bedächtig. Nicht eilen
II. In gemächlicher Bewegung. Ohne Hast
III. Ruhevoll (Poco adagio)
IV. Sehr behaglich

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：横浜みなとみらいホール（11/29）、アフラック生命保険株式会社（11/30）

11/24 名曲
11/29 横浜マチネー
11/30 定期
Maestro

指揮

**フランソワ＝グザヴィエ・ロト**

FRANÇOIS-XAVIER ROTH, Conductor



©Wolf-Peter Steinheisser

## 11年ぶりの再客演！ フランスの名匠が贈る 多彩なプログラム

独自の音楽解釈と洗練された音楽作りで国際的に活躍するフランスの名匠が読響の指揮台に再登場。マーラー交響曲第4番、ヤナーチェク〈シンフォニエッタ〉などの名曲を揃えた渾身（こんしん）の2プログラム・3公演を指揮する。切れ味鋭いタクトから鮮烈なサウンドを生み、会場を興奮の渦に巻き込むだろう。

1971年、パリ生まれ。パリ国立音楽院在学中にフルートから指揮へ転向。2000年にドナテッラ・フリック国際指揮者コンクールで優勝。革新的なプログラムに取り組むオーケストラ“レ・シエクル”を03年に創立し、近現代作品をピリオド楽器によって演奏するスタイルで注目を浴びた。15年から24年までケルン・ギュルツェニヒ管の音楽監督およびケルン歌劇場の音楽総監督を、25年からは南西ドイツ放送（SWR）響の首席指揮者を務めるなど、充実した音楽活動を展開している。音楽への画期的なアプローチと妥協を許さない姿勢は世界中で高い評価を得る。これまでにベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、バイエルン放送響、ミュンヘン・フィル、ウィーン響、ロンドン響など多くの一流楽団に客演し、世界中の聴衆を魅了している。録音活動にも力を注いでおり、ギュルツェニヒ管と共にマーラーやシューマンの交響曲を収録したCDは数々の賞に輝いた。そのほか多数の功績が称（たた）えられ、17年にフランス芸術文化勲章「シュヴァリエ」を受章した。読響には15年以来、実に11年ぶりの登場となる。





©Anoush Abrar

フルート

**エマニュエル・パユ**

EMMANUEL PAHUD, Flute

ベルリン・フィルの首席奏者を務め、ソロでも活躍する世界最高峰のフルート奏者。1970年ジュネーヴ生まれ。89年神戸国際フルートコンクール第1位、92年ジュネーヴ国際音楽コンクール第1位など受賞多数。93年ベルリン・フィルの首席奏者に就任以降、同楽団のソロとして活動するほか、ソリストとしてもアバド、アントニーニ、バレンボイムらの指揮で世界の名だたるオーケストラと共演。日本ではリサイタルやオーケストラとの共演のほか、アンサンブル公演やマスタークラスも行っている。ワーナークラシックスと専属契約を結び、数々のCDをリリース。フランス芸術文化勲章「シュヴァリエ」受章。英国王立音楽院名誉会員。2024年レオニー・ソニング音楽賞を受賞。読響とは1997年の初登場以降、多数共演。

11/29 横浜マチネー
11/30 定期
Artist

隅々までコントロールされた美声で魅了するソプラノ。広島県出身。国立音楽大学声楽専修及び同大学院修士課程修了。新国立劇場オペラ研修所修了後、文化庁新進芸術家海外研修員としてミラノとルガーノで研鑽（けんさん）を積む。東京音楽コンクール声楽部門第2位、日本音楽コンクール声楽部門（歌曲）第2位など受賞多数。東京二期会、新国立劇場、日生劇場などで〈椿姫〉題名役、〈魔笛〉パパゲーナ、〈フィガロの結婚〉スザンナなどを歌い好評を博す。ベートーヴェン〈第九〉、マーラー〈交響曲第4番〉のソリストとして広島響、東京フィル、新日本フィル、東京響などと共演。2025年11月には〈夕鶴〉つうで読響と共演して絶賛された。27年東京二期会〈ラ・ボエーム〉ムゼッタ、新国立劇場〈ばらの騎士〉ゾフィーで出演予定。二期会会員。



©STUDIO KUMU

ソプラノ

**種谷典子**

NORIKO TANETANI, Soprano

11/29 横浜マチネー
11/30 定期
Artist

## ヤナーチェク
## 狂詩曲〈タラス・ブーリバ〉

チェコで汎スラヴ主義が力を持った背景には、少し複雑な事情がある。二重帝国のハンガリー側で起こった反ハプスブルク運動は、マジャール民族主義を強く打ち出した結果、域内に暮らすスラヴ人を抑圧するにいたる。汎スラヴ主義は、反ハプスブルクの先達としてハンガリーの民族運動に範をとるも、当のハンガリーによる抑圧から解放されることも目的とした。

その「汎」の範囲にはスラヴ唯一の大国ロシアも入る。ロシア主導の汎スラヴ主義は、荒っぽく言えば（バルカン半島に勢力を拡大したい）ロシアの帝国主義とほとんど同義だ。だから、チェコにおいて必ずしもすんなりと受け入れられるものではなかった。

とはいえ、文化的汎スラヴ主義となると話は別である。レオシュ・ヤナーチェク（1854〜1928）がロシアの作家ニコライ・ゴーゴリに傾倒し、その小説『タラス・ブーリバ』（1835年/42年改訂）を音楽の題材にしようとしたのも、「『汎』にロシアを含む文化的スラヴ主義」に基づいている。コサック軍団長ブーリバのロシア民族への“帰依”の強さと、それに発する剛毅な英雄性とを、作曲家は称揚することを目指した。

**第1曲「アンドレイの死」**　ブーリバの次男アンドレイは、ポーランド軍の敵将の娘と恋に落ちる。音楽は愛の心情、両軍の交戦、残酷な運命を描く。ブーリバはためらうことなく裏切り者の次男を手にかける。軍団長は“泣かずに馬謖を斬った”。

**第2曲「オスタップの死」**　長男のオスタップは交戦の際、ポーランド軍に捕らえられ、ワルシャワに移送される。同地の市民は民俗舞踊マズルカで、オスタップの捕囚を喜ぶ。長男は父親を呼ぶ声を張り上げ、事切れる。

**第3曲「タラス・ブーリバの予言と死」**　ブーリバはポーランドを転戦しつつ、オスタップの弔い合戦を繰り広げる。やがてドニエプル河畔で捕らえられ処刑されるが、今際の際にロシアの勝利と栄光を予言する。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1915年（初稿）、18年（第2稿）／初演：1921年10月9日、ブルノ／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2（エスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、鐘）、ハープ、オルガン、弦五部



## モーツァルト
## 交響曲 第34番 ハ長調 K.338

もし、18世紀の終わりのウィーンに21世紀並みの消費者マインドがあったら、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756〜91）は間違いなく非難されていた。

モーツァルトは1786年、フュルステンベルク侯爵に「最新作」との触れ込みで交響曲のパート譜セットを3曲分、売却した。この「最新作」というところに問題がある。その3曲がすべて既存作だったからだ。交響曲第34番 ハ長調 K.338 はそのうちの1曲である（他2曲は同第33番K.319と第36番〈リンツ〉 K.425）。懐の深いことに、侯爵は作曲家の誤魔化しを知りながら、まとめて楽譜を引き取ってくれた。そのメセナ活動により、この時期のモーツァルトの生活を支えたことになる。

さて、「最新作」というのはどのくらい派手な嘘だったか。K.338の完成年は1780年（K.319にいたっては79年）なので、6年以上も鯖を読んでいた。1780年と言えば、モーツァルトが故郷ザルツブルクを離れた年だ。つまりK.338は、モーツァルトが同地で書いた最後の交響曲である。

**第1楽章**　いかにも開幕といったファンファーレ。続く「長長短長長長ー」のリズムを、さまざまな工夫で聴かせる。第2主題は滑らかな半音下行から。なお、同楽章自筆譜の最終ページの裏にはメヌエットが14小節だけ残る。4楽章制を目論んだ痕跡である。

**第2楽章**　作曲家はもともと「歩く速さで」と速度表示したが、実演で想定より遅く弾かれるのを聴き、フュルステンベルク侯に売った楽譜には「おおむね快速に」と書き足し、軽やかなテンポを指示した。

**第3楽章**　舞曲ジグのリズムで前進する無窮動。敷き詰められた軽快な8分音符が、短調に移旋した展開部ではわずかの間、姿を消す。その後に推力を取り戻して再現部に突入する。この対比の鮮やかさが、来るウィーン時代の充実した交響曲書法を予感させる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1780年／初演：1780年9月2・3・4日のいずれか、ザルツブルク／演奏時間：約21分
楽器編成／オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

## ヤナーチェク
## シンフォニエッタ

ヤナーチェクは1886年から1902年にかけて、スタレー・ブルノ・ギムナジウムに音楽教師として赴任した。チェコでは国土の西部6割ほどをボヘミア地方、東部4割ほどをモラヴィア地方と呼ぶ。ブルノは後者の中心地だ。

同校の同僚教師フランティシェク・バルトシュは、民謡の収集活動で有名な民俗学者・言語学者だった。ヤナーチェクはその手伝いを願い出る。はじめは集めた素材を管弦楽用に編曲したりしていたが、やがて本格的に作曲家として立つ決心を固める。こうしたスタートラインがヤナーチェクを、チェコ音楽の独自性の追求に向かわせた。それは音楽面（民俗音楽）、文学面（チェコの神話・文学）はもちろん、思想面（国民国家としてのチェコへの共感）にまで及んでいる。

1926年の管弦楽曲〈シンフォニエッタ〉は、そういった独自性を追求した成果のひとつだ。この作品の契機は18年の暫定政府の樹立と、20年のチェコスロヴァキア共和国（第一共和国）の成立にある。ドイツ系のハプスブルク家による支配から独立し、チェコとスロヴァキアが国民国家を作り上げた。

それを受けて19世紀以来の愛国団体「ソコル」が作曲家に作品を委嘱する。「ソコル」とは1862年創設の体育協会。体操などの普及を通して民族の団結を民主主義的に促す。活動拠点たる各地の体育館は図書室や講義室を併せ持ち、ここでは体操のみならず演劇や音楽の公演も開催されていた。その活動は大きな広がりをみせるが、為政者側は当然、真の目的の“危険性”を看破する。実際、戦間期にその“波”がロシアにまで到達すると、ソヴィエト連邦当局は団体の活動を禁止した。

ヤナーチェクは「ソコル」の委嘱に呼応し、楽曲で「（オーストリアの支配から解放された）自由なチェコの人々をあらわそうとした」という。つまり、独立闘争の勝利とその精神を音楽として表現する。こうした思いで書き上げた〈シンフォニエッタ〉を作曲家は、チェコスロヴァキア陸軍に献げるつもりでいた。実際、タイトルは当初〈軍隊シンフォニエッタ〉だった（のちに「軍隊」を削除する）。

曲は5つの楽章からなる。「シンフォニー」に縮小語尾をつけたタイトル（＝小交響曲）とは裏腹に、その交響曲性は薄い。まず、各楽章には当初、標題があった。いずれもブルノの情景に由来する。次に、ソナタ形式などの交響曲（＝管弦楽ソナタ）の構成原理を採用していない。さらに、軍楽由来のファンファーレ主題を全曲の基礎に置いている。音楽様式史的には、19世紀末から続く交響曲の「意味の拡大」（それは逆説的に、編成等の規模の縮小を含む）の路線上にあると言ってもよい。

上記の通りこの作品は、実質的にはブルノを舞台とした愛国的交響詩だ。ニュートラルなタイトルを採用すること（さらには、そこから「軍隊」を取り去ること）によって、作品の内部を貫く自由と独立の気概をいっそう普遍的な価値として位置付けようとする自身の意図を、ヤナーチェクが聴き手に読み取らせようとしていたとみても、あながち間違いではなかろう。

**第1楽章「ファンファーレ」**：全楽章の基本モチーフ。ティンパニに現れる短短長長短短の回文韻律は、民謡の典型的なリズムである。

**第2楽章「城」**：タイトルはブルノ郊外の「シュピルベルク城」を指す。おどろおどろしい冒頭の後、民謡風の執拗（しつよう）な繰り返しを経て、伸びやかな旋律が登場。以後、繰り返しと伸びやかな旋律とが統合される。

**第3楽章「修道院」**：ゆったりと短長リズムを刻む弦楽器群を、金管群が信号風の短長リズムで遮る。続く舞曲風の部分で弦管両群が、短長リズムをやりとりする。標題はブルノの「王妃の修道院」の意。

**第4楽章「城への路」**：冒頭楽章の回文韻律を利用したファンファーレを繰り返す中、様々な楽想をそこに織り込んでいく。

**第5楽章「市庁舎」**：「ブルノの旧市庁舎」。静かに始まるが、徐々に推進力を高めながら前進し、満を持してファンファーレ主題を回帰させる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1926年／初演：1926年6月26日、プラハ／演奏時間：約24分
楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2（エスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン4、チューバ、バンダ（トランペット9、バストランペット2、テナーチューバ2）、ティンパニ、打楽器（シンバル、サスペンデッド・シンバル、グロッケンシュピール、鐘）、ハープ、弦五部

## マヌリ
## サッカード ～フルートとオーケストラのための

フランスはトゥール出身の作曲家フィリップ・マヌリ（1952～）は、IRCAM（フランス国立音響音楽研究所）を拠点としたライブ・エレクトロニクス分野における先駆者として知られている。しかし、2018年に作曲された〈サッカード〉は電子音を用いない、演奏時間25分ほどのフルートとオーケストラのための協奏曲である。同年7月8日、エマニュエル・パユの独奏、フランソワ=グザヴィエ・ロトが指揮したケルン・ギュルツェニヒ管によって初演された。

カフカの『審判』に基づくオペラ〈K…〉（2001）をはじめ、複数のオペラを手がけてきたマヌリの劇的な筆致は、独奏フルートとオーケストラとの対話にも色濃く反映されている。本作のタイトル「サッカード Saccades」はフランス語で「ぎくしゃくした不規則な動き」を意味するのだが、なるほどその音楽は拍子を持たない自由な独奏フルートの旋律によって静かに始まり、拍節のある部分とない部分とが細かく交代しながら「ぎくしゃく」と進んでゆく。弦楽器は細かく分割され、イングリッシュ・ホルンやチェレスタ、ハープを編成に含むオーケストラは次第に厚みを増し、独自の交響的書法を確立しながら、緊張感を高めていく。ソロとトゥッティ、両者の均衡は保たれるかにみえるが、独奏フルートはやがて自我を求めるかのように荒々しく突き進む。終盤では甲高く制御を失ったフルートと幻滅したかのようなオーケストラとが、音空間の両極へと引き裂かれてゆく――その劇的なすれ違いの中にこそ、この作品の核心があるのではないか。曲は両者の分裂を融和させることなく、オーケストラが退いたあとに残された独奏フルートのカデンツァのうちに、静かに幕を閉じる。

今回の演奏は初演を務めた二人によるものであることからも、彼らの息の合った再演に期待したい。

〈内藤眞帆 音楽学〉

作曲：2018年／初演：2018年7月8日、ケルン／演奏時間：約25分
楽器編成／フルート3（ピッコロ、アルトフルート持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、打楽器（大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、グロッケンシュピール、マリンバ、シロフォン、ヴィブラフォン、スレイベル、クラベス、ウッドブロック、クロテイル、金属、ゴング、木鉦）、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏フルート

## マーラー
## 交響曲 第４番 ト長調〈大いなる喜びへの賛歌〉

1896年の夏、それまでに作曲した交響曲の中で最も規模が大きい交響曲第３番の自筆総譜を完成させたグスタフ・マーラー（1860〜1911）は、次作の構想を練るにあたり十分な時間を要したようだ。1897年にウィーン宮廷歌劇場の劇場監督に就任したのち、第４番の着想を得たのは1899年のこと。オーストリアの保養地バート・アウスゼーでの夏季休暇中に、自身の歌曲集〈子供の不思議な角笛〉より「天上の生活」を交響曲に組み込む術を思いついたのである。1892年に作曲されたこの歌曲は、交響曲第３番の終楽章（第７楽章）に用いられる予定であったが、結局第３番はアダージョをフィナーレに据える６楽章構成となった。当初の計画の着地点を３年越しに見つけたマーラーは、休暇終盤の数日で最初の３楽章の草稿を半ば書き上げ、翌1900年８月５日、オーストリアのヴェルター湖畔マイヤーニックで自筆総譜を完成させた。翌年修整が加えられ、初演は1901年11月25日にミュンヘンで作曲家自身の指揮により行われた。

古典的な４楽章構成をとる第４番は、演奏時間は第３番のおよそ半分ほど、編成もマーラーの交響曲の中で最も小さく、室内楽的とさえいえる。各楽章における主題や動機の多くは歌曲からの引用もしくはパラフレーズされたもの。歌曲を交響曲に取り入れる手法は彼の以前の作品にもみられるが、第４番ではそれが着想の出発点であると同時に、作品の到達点＝フィナーレともなっている。ベートーヴェン以来の「苦悩から栄光へ per aspera ad astra」というフィナーレ志向の交響曲のドラマトゥルギーにマーラーはここで対峙し、決別を図った。第４番の終楽章は全楽章の中で最も短く簡素で、マーラー自身も「先細りになる頂点」と表現した。また合唱ではなくソプラノ独唱のみを用いることで、ベートーヴェンの第９番や自身の第２番とも一線を画している。

鈴の音とともに軽快に開始する**第１楽章**。音楽批評家パウル・ベッカーがこの作品について「終楽章から遡って捉えねばならない」と述べたように、この鈴の動機は終楽章の歌曲から引用され、重要な箇所で繰り返し登場する。短い導入のあとにヴァイオリンに導かれて提示される主要主題は、リズムや音程の異なる特徴を備えた複数の要素から成るが、それぞれが互いに派生してゆく。チェロが奏でる表情豊かな副次主題ののち、オーボエによる軽やかな旋律によって展開部へ。ポロネーズ風の舞曲の様式や、目まぐるしいリズムの変化、鈴の動機に続く主要主題の変奏などを経て、再現部、そして激しくもあっけないコーダで締めくくられる。

一転して**第２楽章**は、マーラーが「死の舞踏」と題した不気味なスケルツォである。そのグロテスクさを演出するのは、全音（長２度）高く調弦された独奏ヴァイオリンのフィドルのような鄙びた音色だ。トリオ部を２回挟む形式を取るが、反復しつつも自由な「変奏」によって進められる様は無秩序に聴こえることもあるだろう。しかし、冒頭でファゴットとオーボエが提示する連続した５度音程の動機が、節目節目で形式を際立たせる。

対照的な冒頭の２つの楽章の世界から離れ、**第３楽章**は内省的なアダージョ。他の楽章にみられる諧謔や皮肉といったものに対し、ここでは限界まで純粋かつ美しい響きのみが追求される。二つの主題は漸進的に変化し、最終的にはニ長調へと収斂し、ト長調ではじまる終楽章へと繋がっていく。

ソプラノ独唱を伴う**第４楽章**の歌詞は、民謡詩集『子供の不思議な角笛』より「天国にはヴァイオリンがいっぱい」にマーラーが手を加えたものである。そこではあらゆる美食と音楽に満ちた天国が描かれるが、その内容は具体的かつ時に残酷だ――仔羊や雄牛は屠られ、聖マルタは料理番をし、聖ウルスラの一万一千の乙女たちが舞う。マーラーは、詩を「途方もない悪戯と深い神秘主義とが結びついたもの」と形容した。作品冒頭の鈴の動機はここでも各節の間に回帰し、無邪気な天上の幻想を突如断ち切る。各節末は讃美歌風の終止で結ばれ、終節は「天上の音楽」を歌いつつ、祈りと結びつくホ長調へと至る。従来のフィナーレ観を退けたこの楽章で、天上の幻想は解決されぬまま消え入るように、静かに残されるのだ。

〈内藤眞帆 音楽学〉

作曲：1899〜1900年、のち1911年に至るまで数度にわたり改訂／初演：1901年11月25日、ミュンヘン（作曲者自身の指揮）／演奏時間：約55分
楽器編成／フルート４（ピッコロ持替）、オーボエ３（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット３（エスクラリネット、バスクラリネット持替）、ファゴット３（コントラファゴット持替）、ホルン４、トランペット３、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、銅鑼、鈴）、ハープ、弦五部、独唱ソプラノ


11/29
横浜マチネー
11/30
定期
Program Notes

《歌詞対訳》

# 交響曲 第4番〈大いなる喜びへの賛歌〉

## Das himmlische Leben　天上の生活

訳：内藤眞帆

| | |
|---|---|
| Wir genießen die himmlischen Freuden, | 私たちは天上の喜びを味わう |
| drum tun wir das Irdische meiden. | ゆえに地上のものごとは避ける |
| Kein weltlich Getümmel | 世のどんな喧騒(けんそう)も |
| hört man nicht im Himmel! | 天上では聴こえない！ |
| Lebt Alles in sanftester Ruh'! | すべては安らぎにある！ |
| Wir führen ein englisches Leben! | 私たちは天使のように暮らしている！ |
| Sind dennoch ganz lustig daneben! | それでいて愉快そのものだ！ |
| Wir tanzen und springen, | 私たちは踊って飛びはね |
| wir hüpfen und singen! | 走り回って歌う！ |
| Sanct Peter im Himmel sieht zu! | 聖ペトロが天から見給(たま)う！ |
| | |
| Johannes das Lämmlein auslasset, | ヨハネが仔羊を放し |
| der Metzger Herodes drauf passet! | ヘロデが屠(ほふ)ろうと待ち受ける！ |
| Wir führen ein geduldig's, | 私たちはおとなしく |
| unschuldig's, geduldig's, | 無垢でとにかくおとなしい |
| ein liebliches Lämmlein zu Tod! | 愛らしい仔羊を死に追いやる！ |
| Sanct Lucas den Ochsen tät schlachten | 聖ルカは雄牛を |
| ohn' einig's Bedenken und Achten, | 何のためらいもなく屠る |
| der Wein kost kein Heller | ワインは天上の酒場では |
| im himmlischen Keller, | 一文もかからず |
| die Englein, die backen das Brot. | 天使たちがパンを焼いている。 |
| | |
| Gut' Kräuter von allerhand Arten, | ありとあらゆる見事な植物が |
| die wachsen im himmlischen Garten! | 天上の庭には生えている！ |
| Gut' Spargel, Fisolen | よいアスパラガスやいんげん豆 |
| und was wir nur wollen! | そして望むものはなんでも！ |
| Ganze Schüsseln voll sind uns bereit! | 皿いっぱいに差し出される！ |
| Gut' Äpfel, gut' Birn' und gut' Trauben! | よい林檎(りんご)に梨、葡萄(ぶどう)！ |
| die Gärtner, die Alles erlauben! | 庭番は何でも採らせてくれる！ |
| Willst Rehbock, willst Hasen, | 雄鹿でも兎でも |
| auf offener Straßen | そのあたりの道から |
| sie laufen herbei! | こちらに走ってくる！ |
| | |
| Sollt ein Fasttag etwa kommen | 断食日が来るとなれば |
| alle Fische gleich mit Freuden angeschwommen! | 魚はみな喜んで泳いでくる！ |
| Dort läuft schon Sanct Peter | そこでは聖ペテロが |
| mit Netz und mit Köder | 網と餌を持って |
| zum himmlischen Weiher hinein. | 天上のいけすへと駆け込む |
| Sanct Martha die Köchin muß sein. | 聖マルタは料理番だろう。 |
| | |
| Kein Musik ist ja nicht auf Erden, | 地上のどんな音楽も |
| die uns'rer verglichen kann werden. | 私たちのものとは比べようがない |
| Elftausend Jungfrauen | 一万一千の乙女たちが |
| zu tanzen sich trauen! | 思い思いに舞い踊る！ |
| Sanct Ursula selbst dazu lacht! | 聖ウルスラさえ微笑(ほほえ)んでいる！ |
| Cäcilia mit ihren Verwandten | ツェツィーリアとその一族は |
| sind treffliche Hofmusikanten! | 素晴らしい宮廷音楽家！ |
| Die englischen Stimmen | 天使たちの歌声は |
| ermuntern die Sinnen, | 心をかくも元気づけ |
| daß Alles für Freuden erwacht. | あらゆるものが喜びに目覚める。 |